SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

遊牧から定住へ：
赤峰市バーリン右旗の事例を中心に

メタデータ	言語: ja 出版者: 国立民族学博物館・民俗学研究開発センター 公開日: 2008-07-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 楊, 海英 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/2561

遊牧から定住へ

－赤峰市バーリン右旗の事例を中心に－

楊　海英(静岡大学人文学部)

はじめに

1999年2月に中国・内モンゴル自治区赤峰市(Ulaγan Qada Qota)所轄のバーリン右旗(Baγarin baraγun qosiγu)を訪ねた。現在のバーリン地域は、かつては契丹の中興の地であった。モンゴル史との関連でいえば、契丹時代の慶州にはモンゴル最後の大ハーン、リクダン・ハーンが長く宮帳をおいていた。1628年から1629年にかけては、この地で『カンジュール』の翻訳、編集委員会が大ハーンの直接指導のもと、活動していた。宮帳を大興安嶺のふもとに設置し、一大宗教事業にとりかかるなど、すべて新興勢力の満洲族に対抗するためであった。リクダン・ハーンの宮帳が設営されていた場所をいまやチャガン・ソブルガ(白塔)とよぶ(写真1)。

契丹が本拠地とし、モンゴルの大ハーンが宮帳をおくなどしていたいまのバーリン地域は、モンゴルのなかでも牧草地がゆたかなことでしられていた。そのようなイメージをいだきながらバーリン右旗へ旅だったわけであるが、シャルムレン河をわたったときから、現実とイメージとのギャップに直面しなければならなくなった。あたり一面は黄色く裸出した大地で、北西風によって形成しつつある沙丘と瞬間豪雨によって流されてできた巨大な塹壕が目にはいった。沙丘と土砂流出の塹壕は、環境破壊がもっともひどい地域のひとつ、私の故郷オルドスの典型的な風景である。私の想像していたバーリン草原にはふさわしくない。

社会主義制度の成立にともない、内モンゴル自治区政府は遊牧民の定住化を促進してきた。およそ30年間にわたって社会主義計画経済が実施されてきたが、1980年代からは改革開放政策が実施され、経済の路線転換がはかられた。このような背景のもと、バーリン地域でもさまざまな再編成がおこっている。以下、バーリン地域での滞在中に入手した資料をもとに、遊牧から定住、集団経済から個人経営にかわりつつある現在の内モンゴル自治区に居住するモンゴル族の生活変容を報告する。

1 バーリン右旗概況とその住民

ハーリン右旗の旗長ハスバガナ[1]氏(1999年現在43歳)によると、バーリン右旗は現在約18万人の人口を抱え、モンゴル族と漢族はそれぞれ約8万人にのぼるという。旗の面積は10256.36平方キロメートルで、計19のソム[2]からなるという。そのうち17のソムは牧畜ソムで、ほかは農業ソムである。旗政府は大板鎮にある。大板とは「大きい固定建築(バイシン)」に由来する表現だ。いわゆる「大きい固定建築」とは、康熙帝ゆかりの行宮やバーリン王(札薩克)にとついだ公主の宮殿を指す。このように、モンゴル諸部のなかでも、バーリン部の王公は、清朝帝室と緊密な関係をむすんでいた。

家畜の頭数をきいてみた。ウマ20万頭、ウシ40万頭、ヒツジ40万頭、ヤギ80万頭で、ラクダは100頭未満で、総数160万頭との返事だった。

概して遊牧社会ではヒツジとヤギといった「小型家畜」の頭数が「大型家畜」より何倍も多いのが普通である。ウシとヒツジの頭数がほぼ同じであることは注目に値する。ウシは産乳量が多く、乳製品加工に有効なため、頭数を増やしてきた自治区政府の政策が反映されている。また、ヤギがヒツジより多いのも、近年におけるカシミヤの値段の高騰と関連していることが考えられる。このような家畜頭数の比率変動は、バーリン右旗のみならず、内モンゴル全体にみられる傾向である。

旗長から全体説明をうけてから、われわれはひとりの牧民を訪ねた。1999年現在48歳のアルタンゲレル氏(写真2)はバヤンタラ・ソムのタブンバン[3]・ガチャーに属する。モンゴルの氏族名をたずねたら、祖先は満洲人だったという。つまり、アルタンゲレル氏の父は満洲人で、母はモンゴル人だったという。バーリン右旗の満洲人は、当旗の王公に下嫁してきた公主の付添(インジ)人に由来する。アルタンゲレル氏の父もそのような満洲人の後裔のひとりで

---

[1]ハスバガナ旗長はザイサン(Jayisang obuγ)という氏族の出身である。われわれの調査隊がであった同旗の宣伝部副部長はヌチュクート氏族(Nöčügüd obuγ)だった。『バーリン右旗誌』によると、およそ100あまりの氏族がバーリン部にあるという(『バーリン右旗誌』 1990:37)。なお、本稿で使用する『バーリン右旗誌』にはモンゴル語版と漢語版があるが、中国の少数民族地域において、地方史誌はまず漢語で書かれ、検閲をとおったあとに少数民族語に訳されるのが一般的である。そのため、本稿では『バーリン右旗誌』の漢語版を使用する。同旗誌のモンゴル語版は1993年に同じ内蒙古人民出版社からだされている。

[2]ソムはかつての人民公社の継承である。ソムは複数のガチャー(旧生産大隊)からなる。ガチャーの下位組織はドゥグイラン(かつての生産小隊)である。

[3]タブンバンとは、タブン・バイシン(tabun bayising,「五軒の固定建築」との意)の略である。清朝末期にバーリン旗に流入してきた漢族が建てた固定建築のことを指す。なお、当ガチャーの漢族はほとんどこの「五軒の固定建築」を築いた漢族の子孫であるという。

あった。アルタンゲレル氏はモンゴルと自称する[4]。現在でも満洲族の戸籍をもつ人は、タブンバン・ガチャーに約100人弱いるという。

アルタンゲレル氏が属するバヤンタラ・ソムには2800戸計11000人の住民がいる。そのうちモンゴル族は約6000人で、ほかは漢族である。ソムには11のガチャーがあり、うちタブンバン・ガチャーは230戸(823人)のモンゴル族からなる、「純モンゴル・ガチャー」である。ソムの漢族は清朝時代に山東省、河北省の承徳地域から移ってきたひとびとの子孫である。色音氏の研究によると、清朝末期にバーリン旗が旗の西部を開墾地として提供したことで、漢族の流入がはじまったという(色音　1998:182)。『バーリン右旗誌』は、このときの「放墾」は旗札薩克が清朝政府の圧力をうけてやむなく実施したと記述している。実際に墾務がはじまってからはモンゴル族とのトラブルが続出した。当時の放牧地の変動をしめす地図(地図1,2)がのこされている(『バーリン右旗誌』 1990:6-7)。その後、民国初期にはさらに旗南部の草原を「生計地」として漢族に放出したことで、外来人口の急増をまねいた(色音　1998:182)。

旗のある幹部によると、集寧－通遼鉄道(写真3)が1994年代に開通されてから、バーリン右旗への漢族の流入は民国期を上回る勢いをみせているという。その実態は決して人口統計には現れない。政府の建設した鉄道がそのまま漢族流入の大動脈となることは、すでに清朝末期からみられた普遍的な現象である。

2　公有化と私有化のあいだ

アルタンゲレル氏はかつて遠く北のウジュムチン旗まで移動していた。数戸でホト・アイルを形成し、夏営地ではサーハルトの関係をほかのゲルと結んだりしていた。1960年代に入ると、政府の定住化政策をうけて、一部のモンゴル人は固定建築を建てるようになった。それでも臨時移動の一種となるオトルはつづいていた。

現在固定建築の邸宅がたっている場所は、かつての夏営地だったという。アルタンゲレル氏の冬営地はタブンバンから南へ30キロ行ったところのバイントゥベ山[5]にあった。冬営地の近くに秋営地をもうけていた。タブンバンから北へ30キロ離れたナムジンという地は春営地となっていた。

定住した際、アルタンゲレル氏は夏営地に固定家屋を建てて現在にいたる。私が新疆

---

[4]『バーリン右旗誌』によると、清朝時代には3人の公主がバーリン部に嫁いできている。1648(順治五)年に淑慧公主は300戸のインジ、1691(康熙三十)年に栄憲公主は240戸のインジをそれぞれつれてきている。1750(乾隆十五)年にきた和婉公主のインジ数は不明である(『バーリン右旗誌』1990:2-5)。なお、内モンゴル東部において、長くモンゴル族と混住した満洲人がモンゴルと称するようになった事例はほかにも報告されている(ボルジギン＝ブレンサイン　2000:44-54)。

[5]地図1の「巴林遊牧図」では巴彦陶白山と表記されている。

ウイグル自治区でみた事例では、冬営地で最初の固定家屋があらわれることが多かった。内モンゴルのオルドス地域の山岳部でもやはり冬営地での滞在中に定住を命じられた例がほとんどであった(楊　2000:70)。バーリン右旗の場合、たとえばアルタンゲレル氏が長年使用していた冬営地には別の人が定住したという。おそらく漢族の進出と農地拡大によって草原が狭小化し、定住の地を選択できる余裕がなかったのではなかろうか。現在、天幕を所有している者はほとんどいない。モンゴル族もみな固定建築に住むようになった(写真4)。

すでに定住する以前から、家畜は人民公社の公有財産であった。改革開放政策の一環として、家畜がふたたび私有化されたのは、1981年のことである。当時ガチャー全体の家畜頭数を人口数で均等に割るかたちで分配されたという。分配された当時の頭数と現在の所有頭数が表1である。

定住後のもうひとつの大きな変化として、1997年12月の草原分割があげられよう。家畜同様、草原も国家の公有財産であったが、このときから個人による30年間の長期使用がみとめられた。

アルタンゲレル氏には1997年に約900畝の草原がわりあてられた。各世帯の人口を優先し、家畜の所有頭数を参考に草原が分割された。草原は家から10数キロはなれたところに、数カ所に分かれるかたちでもらうことになった。タブンバン・ガチャーでは900畝は平均的な数字で、ほかのソムでは3000畝もの草原をもつ人がいるという。わりあてられた草原の一部は鉄網でかこいをもうけ、夏のあいだ家畜を放さないで越冬にそなえる。草がとくに高く生長したところでは秋に草刈りもおこなう。かつては長距離移動によって家畜を増やしてきたが、いまやかぎられた範囲内でいかに個人経営を工夫するかにかかっているという。

牧民は国家の草原を使用する期間中に、毎年「草原税」をはらう。「草原税」は全収入の5%を越えないように定められているとのことであった。アルタンゲレル氏はいままで毎年約370元の「草原税」をはらってきたという。

このように、牧民は国家とのあいだに30年間の使用契約をかわされている。草原を他人に貸したりすることも可能である。契約者の死後にはその子孫に継承権が保証されている。ただし、売買はゆるされていない。

おわりに

公有化と再度の私有化を経験しながら、遊牧から定住にいたった。およそ30年間にわたってすすめられた結果、社会のさまざまな面で変容がみられる。

第一、モンゴル族同士の社会的な連携が弱体化した。かつて移動遊牧のときは、ホト・アイルという伝統的な社会組織が機能していた。ホト・アイルの実態は血縁的なつながりをもつ者同士の場合もあれば、富者と貧者の構成もあった。定住化によってこのような連携がみられなくなった。

第二、連携が衰退しただけでなく、草原の私有化により、モンゴル族同士の草原をめぐるトラブルが増加した。わりあてられた草原を鉄網でかこんでも、家畜は進入をくりかえす。草を食べつくされることは、越冬を難しくし、生産力の後退をもたらす。草原を共同で利用していたとき以上に、私有財産をめぐる紛糾が増えている。

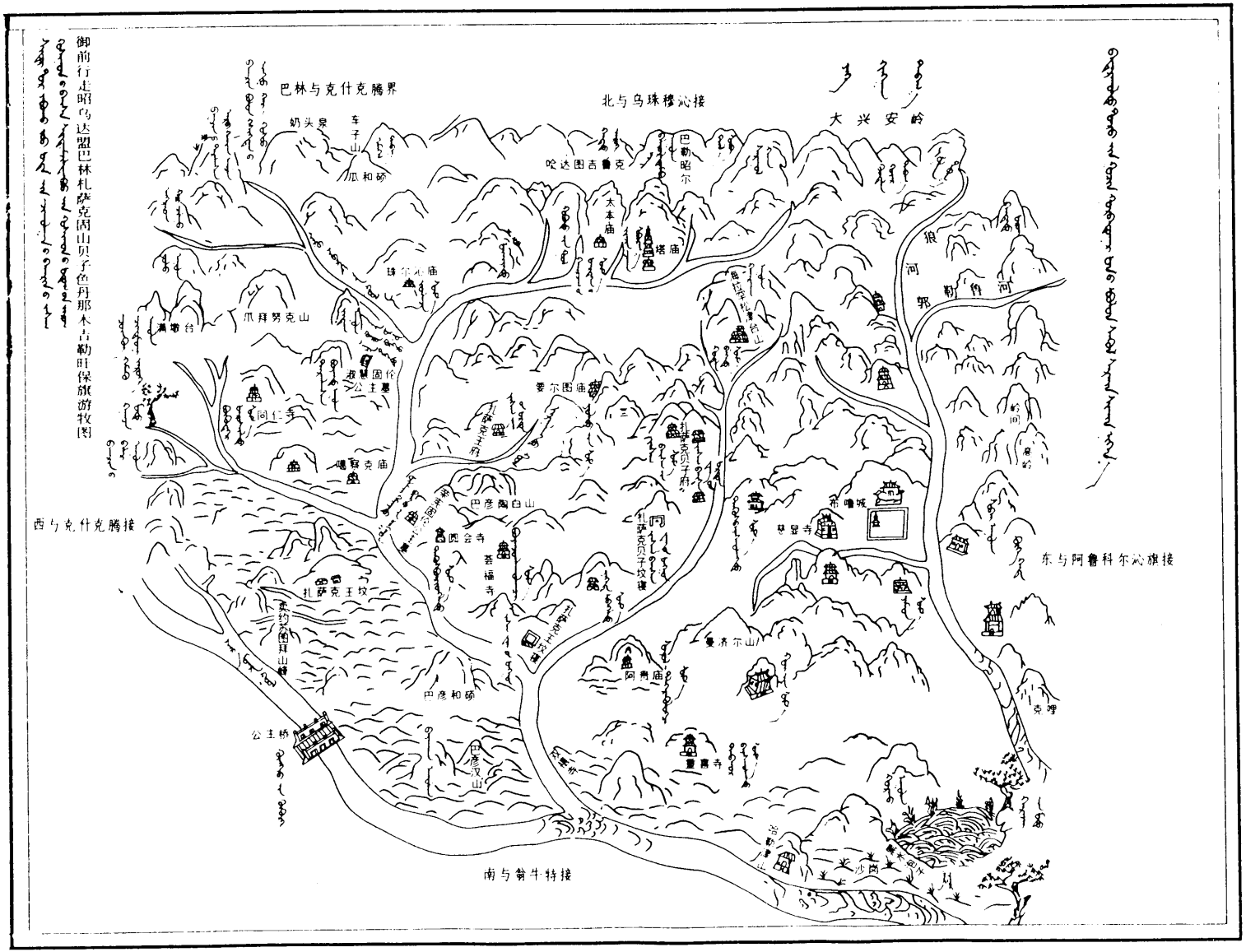
第三、「家畜」の構成に変化をもたらしている。ウマ、ウシ、ラクダ、ヒツジ、ヤギといった五種類のみを家畜(マル)とみなすモンゴル族にとって、どの家庭も五種を同時に所有するのが普通であった。定住により、ラクダとウマはバーリン地域から急ピッチで減少しつつある。長距離移動に欠かせなかったラクダは無用の動物になり、おまけに私有草原の鉄網をこわす存在と化した。ウマは広い草原を移動しながら草をたべる習性をもつが、自由移動は保証されていない。駿馬にまたがるよりも、バイクや自動車を買おうとする若者が増え、価値観の変化もウマの減少につながる(写真5)。

第四、食生活にも変化がみられた。乳製品の種類が減り、食生活のなかにしめる割合がさがってきた。

バーリン右旗の事例は決して特別なものではない。草原をめぐるトラブル、特定種家畜の減少ないし消滅などといった現象は、バーリン部より早く定住した地域ではすでに数十年も前からみられた。今後、牧畜のみの経営はますます困難になり、農業の割合が高くなるにちがいない。営農経験は漢族より乏しいことから、民族間の貧富の差が顕著になっていくであろう。

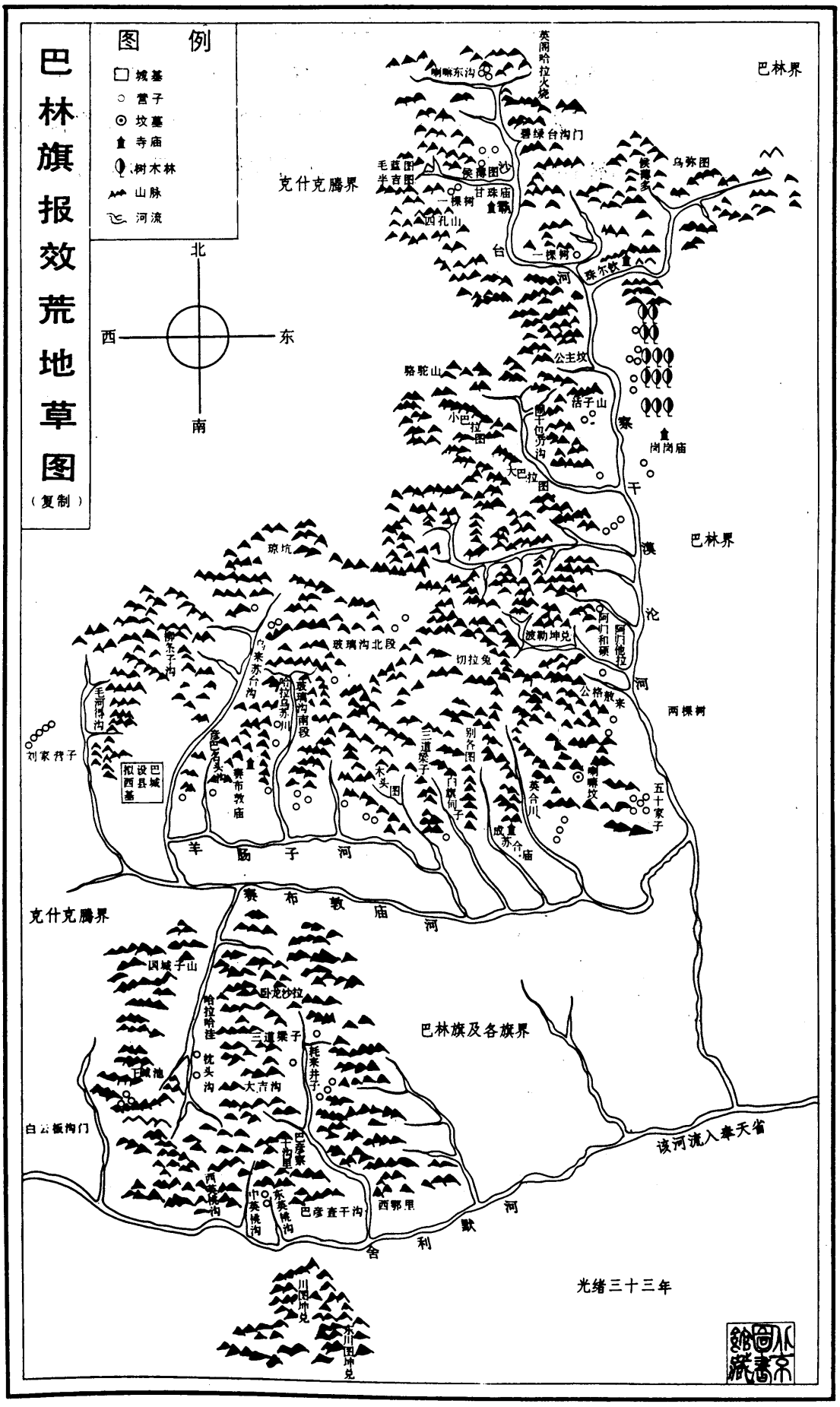
参考文献

『巴林右旗誌』編纂委員会
1990『巴林右旗誌』内蒙古人民出版社。
ボルジギン・ブレンサイン
2000「ホルチン左翼中旗東ジャングタイ村の《徳氏化譜》について－満洲人からモンゴル人へ」『満族史研究通信』9, 44-54。
色音
1998『蒙古遊牧社会的変遷』内蒙古人民出版社。
楊 海英
2000「アルブス山とチンギス・ハーン－学術研究と文化復興運動の相互作用」『静岡大学人文論集』51.1, 27-77。



地図1　バーリン旗札薩克から理藩院に提出された旗の境界図

光緒三十三年冬の最後の月の一日(陰暦1907年12月1日)に作成されたもの



地図2　バーリン旗から清朝政府に提出された「報墾図」

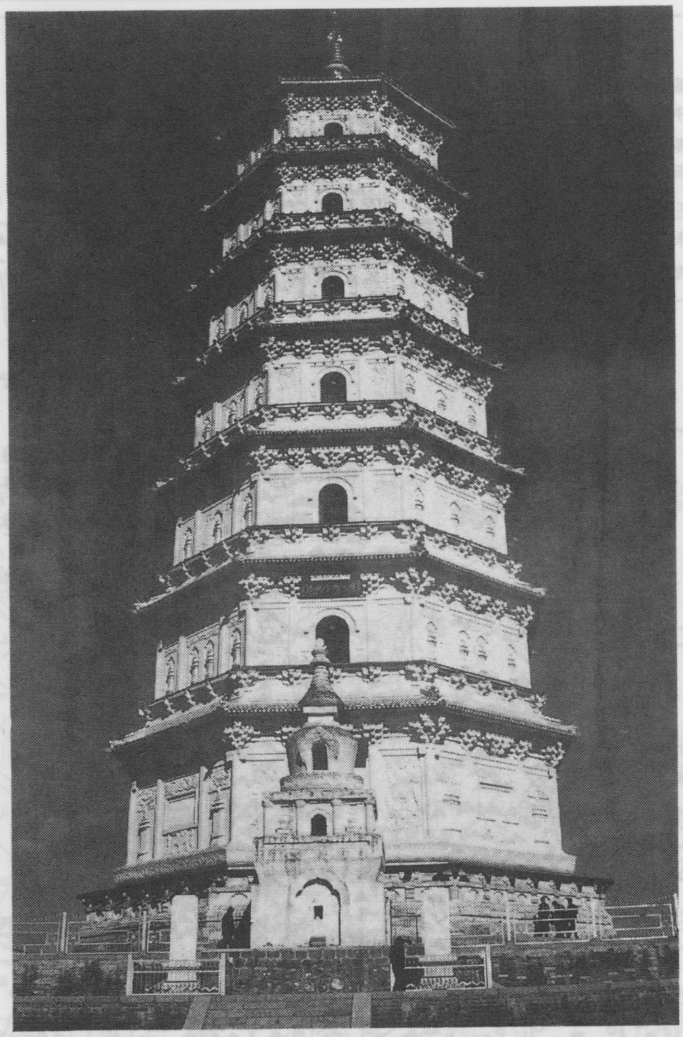


写真1　契丹時代の白塔

写真2　アルタンゲレル氏とその家族

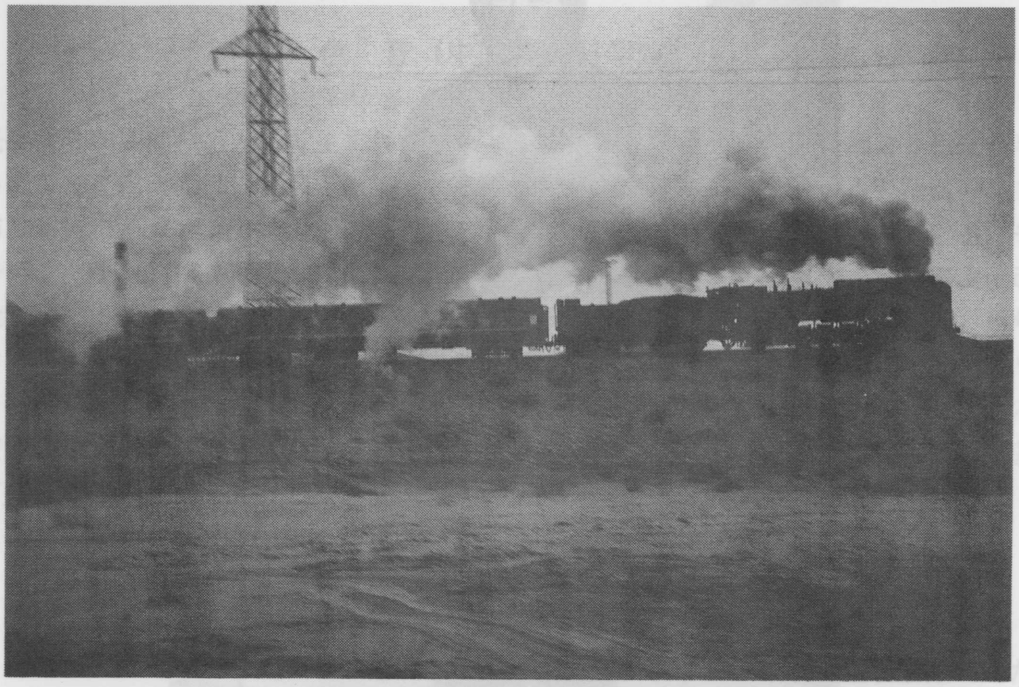


写真3　集寧－通遼鉄道

写真4　バーリン右旗モンゴル族の固定建築

写真5　徒歩で放牧するバーリン右旗のモンゴル人
（手にしているのは投石道具）

表1　バーリン右旗一牧民の家畜頭数変化

	1981年分配当時	1999年の所有頭数
ウマ	6	3
ウシ	10	40
ラクダ	0	0
ヒツジ	18	170
ヤギ	0	50